

早稲田大学 文学部 世界史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	難易度はやや易化。大問7題は昨年と同じだが全体の設問数は50問と7問増加。昨年は1題出題された地図は出なかった。小論述は昨年同様独立した1題で字数は20字から20字に増加した。古代史は連年の出題。これに反して近現代、とくに20世紀からは1題だけと現代史軽視の傾向が強い。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
〔 〕	古代オリエント・アレクサンドロス大王	アッシリア関係は易しい。一時ミタンニに服属していたことも定番。新バビロニア関係は教科書本文のレベル。アレクサンドロス関係も易しいが、大王がどこで没したかはやや細かい。ただ、どこの教科書にも出ている関連地図を頭に入れていれば簡単に正解できる。	易
〔 〕	中国前近代の分裂時代	Aの縦横家の2人(蘇秦と張儀)は、取り違えが置きやすい。このような並列で登場する人物・事項はしっかり差別化しておきたい。C - 4は五胡十六国の年代が問題文に示されているので、あとはカタラウヌムの戦いの年代(451)がわかるかどうかである。Dの都は現在の開封。五代のうち後唐だけが洛陽に都をおいた。開封は文化構想学部でも出題されていた。	標準
〔 〕	キリスト教・イスラーム教・ユダヤ教の巡礼・聖地・聖堂	Aのサンチャゴ=デ=コンポステラはキリスト教三大聖地の1つで受験界の隠れた定番項目だが、そこが誰の墓かは難しい。B - 9のサン=ピエトロ大聖堂の大改築はブラマンテ ラファエロ ミケランジェロの順で設計を担当した。語群にはラファエロとミケランジェロの両方があり一見難しそうだが、しかし問題文に「彫刻家」とあり、迷わずミケランジェロを選ぶ。	標準
〔 〕	ヨーロッパの14世紀	全問、教科書レベルで十分対応できる。	易
〔 〕	ポルトガルのインド航路開拓時代	設問4のマヌエル1世在位時代の出来事は、本文に在位年代が示してあるので簡単に答えられる。設問2のセウタ・アゾレス諸島・ヴェルデ岬はどれも教科書レベル。	易

番号	出題内容	コメント	難易度
[]	アヘン戦争から19世紀末までの中国の改革思想	設問2の湘軍を率いた人物左宗棠は、正攻法では難しいが消去法で対処可能。湘軍イコール曾国藩というのが一般的発想なので、語群に曾国藩が入っていたら厄介だった。左宗棠の中央アジア関係は用語集に詳しく説明がある。設問3 - ロの内容はコーカンド=ハン国出身のヤクブ=ベクのこと。サイド=アリー=ムハンマドはパーブ教の教祖。ハのヘディンはスウェーデン人。設問4のハーグ密使事件は社会科学部でも出ていた。設問6の小論述は指定用語が3つあり、30字という枠に押し込むのが一苦労である。指定語句の中では「軍事技術」の使い方が難しい。	一部難
[]	19～20世紀の独・北欧文化と政治	設問3のグリム兄弟は「童話作家」の先入観にとらわれると答えられない。設問4のフィンランド関係のうちイの言語とニの第二次大戦の敗戦国は問題なし。ロは少々迷ったかも知れないが、独立はロシア十一月革命直後(1917年12月)なので間違い。残りはハだけとなる。ハの内容のうち「ヨーロッパ連合に加盟」は正しいが、「ユーロ通貨を導入」が間違い。ただし、このユーロ導入の如何は消去法でないほとんど無理であろう。	標準

〔総合コメント〕

全体として教科書レベルで対応できる問題が目につく。用語集の隅をつつき回すような学習をしなくても80パーセントはクリアできるだろう。早大の他学部と比べると一見楽そうに見えるが、偏差値68の学部でこのレベルの出題だと高得点者が続出することは必至となり、ささいなミスによる失点が致命傷となってしまう恐れが大である。世界史に限れば、合格ラインは90パーセント以上と見なくてはならない。結局、問題全体から見るとほんの一部の「やや難しい」設問の出来が合否を分けることになりそうだ。文学部だけを念頭において受験する者より、文系の他学部を第一志望にして併願するの方が有利だろう。論述問題も、少ない字数制限の枠に過剰とも思える指定語句がつかねばならないので、指定語句の一部について知識があいまいだと失点につながってしまう。歴史用語や歴史概念について、要領よく答えられるよう準備が必要である。また、こここのところの現代史軽視の傾向もいつまで続くかわからない。古代から現代、西から東まで満遍なく学習しておきたい。